

## ケース 12.5 2006 年アメリカ連邦議会中間選挙とラテンアメリカ人の投票行動

2000 年、2002 年そして 2004 年のアメリカ連邦議会選挙において、ジョージ・W. ブッシュ大統領候補や共和党議員候補が、ラテン系住民の票を民主党以上に獲得して勝利したことで、2006 年の総選挙でも共和党がラテン系住民の票を大きく獲得するのではないかとの予測が盛んにだされた。しかしながら、そうはならなかった。実際の結果は、ラテン系住民は今後とも民主党に大きく傾斜した投票をし続けるだろうというものであった。他の民主主義国家同様に、移民の投票行動が政治にどのような影響を与えるのかという問題は、今後の移民の影響についての研究のなかでも最重要なテーマとなるであろう。

2006 年の総選挙の際の投票所出口調査では、共和党の下院候補はラテン系投票者の 30% の支持しか得られなかったが、それは前回の 2002 年中間選挙より 8%低い数字であった。なお、共和党上院議員候補は 35%、また共和党の州知事候補は 37%の支持しか得ていない、と推計されている (Gimpel, 2007)。

共和党にとり厄介なのは、ラテンアメリカ系住民の地理的な分布は、民主党の強い地域に広がっており、共和党支持の強い州にはあまりいないということである。2006 年の中間選挙でラテン系住民の支持を前回同様に確保できたのは、南部の共和党支持州のみであった。近年、南部諸州ではラテン系住民が増加しているにもかかわらず、多くのラテン系移民は民主党支持の強い州に住む傾向が強く、新移民も既存の政治支持パターンに従って民主党支持に向かう傾向が強いのである。一度、新しい有権者が既存の政党支持パターンを身につけると、それは変更されることなく継続する傾向が高い。

アメリカの中間選挙の投票率は全般的には低調ではあるが、投票率がよく変動するという特色をもっている。共和党に対するラテン系住民の支持が減ったので、共和党が下院と上院における過半数を失ったということではない。つまり、ラテン系住民が連邦議会における移民政策論議が袋小路に入っているからといって共和党に罰を与えたということの意味しない。なぜならば、ラテン系住民の有権者の数は、激戦区の結果を左右するほど大きくはないからである。むしろ、アングロ系白人有権者の共和党への支持が減ったことが大きな原因である (Gimpel, 2007)。

政治再編モデルに反して、ラテン系住民は民主党を共和党の 2 倍の確率で支持することが明らかになった。民主党支持の強い選挙区では、ラテン系住民の 67%が民主党知事候補に投票しており、民主党上院候補には 70%、下院候補には 73%が投票している。なんといっても、2006 年の中間選挙では、ラテン系住民はやはり民主党を支持している、ということが追認されたのである。さらにいえば、ラテン系住民は、移民政策については曖昧な態度を維持し、移民がアメリカでもっとも重要な争点になっているとはみていないのである (Gimpel, 2007)。

【参照文献】

Gimpel, J. (2007) *Latino Voting in the 2006 Election: Realignment to the GOP Remains Distant*, (Washington, D.C.: Center for Immigration Studies).